

韓国におけるオンライン教育と 韓国人日本語学習者の現状

金 東奎

要 旨

韓国におけるオンライン教育としては、K-MOOC とサイバー大学があげられる。K-MOOC は、社会・人文が中心となっており、日本語教育関連の講座は非常に少ない。サイバー大学は、デジタル空間に講義を設け、単位・学位取得を行う教育機関である。サイバー大学は、学習者の多様なニーズに対応可能なコースを設けているが、すべての講座の主旨や配置がオンライン教育の性質を反映しているとは言えない。

韓国人日本語学習者の音声教育における問題点としては、アクセント、イントネーション、清音と濁音、拗音、長音と短音、「ツ」の発音などがあげられる。問題点の原因としては、母語の影響、特に韓国語の音声・音韻的な特徴などが考えられる。韓国人日本語学習者のための指導法・学習法としては、ミニマル・ペアの提示、シャドーイングを通じた反復練習、韓国語の音声構造を利用した発音の指導、手拍子を用いた拍の練習などがあげられる。

キーワード

オンライン教育 韓国人日本語学習者 K-MOOC 音声教育

1. はじめに

本稿¹の目的は、韓国におけるオンライン教育、特に日本語のオンライン教育の現状・問題点と、韓国人日本語学習者の日本語音声教育の現状・指導法について述べることである。

韓国におけるオンライン教育については、K-MOOC とサイバー大学の現状を紹介し、日本語教育の側面から分析する。韓国人日本語学習者の日本語音声教育については、問題点を指摘し、その指導法について述べる。本稿が韓国の日本語オンライン教育の現状及び問題点についての理解を深め、韓国人日本語学習者を対象にした日本語音声教育に示唆することが出来れば幸いである。

2. 韓国におけるオンライン教育の現状

2.1 K-MOOC

2.1.1 K-MOOC の歴史・構成・現状

周知の通り、MOOC とは Massive Open Online Course の略語として、受講者の人数に制限なく (Massive)、多くの人が受講可能で (Open)、ネット基盤で行われる (Online)、一定の目標を達成するための講座 (Course) である。韓国 (Korea) における MOOC は、韓国型 MOOC として、K-MOOC と呼ばれている²⁾。

K-MOOC は 2015 年 2 月に基本計画の樹立及び発表が行われ、同年 12 月に開通した。システム・プラットフォームの構築、参加機関募集なども同年 6 月から 12 月の間に行われ、2017 年 8 月現在、大学 20 校と四つのプロジェクトチームによる講座の提供で運営している。

K-MOOC は、韓国の政府機関である教育部が総括し、国家平生教育振興院が実行しており、企画及び運営を国が担当しているものと言える。ただし、コンテンツの提供は上に述べた大学とプロジェクトチームが行っているのが現状である。

K-MOOC は、大学生・大学院生はもちろん、教授や大学、それから企業や一般市民にまでその対象を広く捉えており、それぞれのニーズに合った講座・コンテンツを提供することを目標としているという。

2017 年 8 月現在、K-MOOC には 368 講座が登録されており、上記の 20 校以外の教育機関や機関・プロジェクトチームからも講座を提供している。講座は、人文、社会、教育、工学、自然、芸術など様々な分野から構成されている。

368 の講座のうち、「日本語」、「人文」、「言語・文学」の三つのキーワードで検索した結果、17 の講座がヒットした。その中で、日本語・日本語教育に関係のあるものは、釜山外国語大学校が提供した「日本語文法」の一つだけであった (講座の公開は終了している)。日本語教育に関する講座は、2017 年 8 月現在、開設されておらず、言語学の観点からの日本語の講座が 1 コース、2016 年 12 月から 2017 年 2 月にかけて開かれただけである。

2.1.2 K-MOOC の問題点

上記の通り、K-MOOC における日本語・日本語教育関連の講座は皆無に等しいものであった。368 講座のうち、「社会」が 111 講座、「人文」が 81 講座、「自然」が 62 講座として上位 3 位を占めており、「教育」のタグが付いた講座はわずか 20 だったが、そのほとんどが教育学や教育理論に関するものであった。日本語教育を始めとする外国語教育に関するものはまったく見当たらなかったのである。

このように、調査の結果、K-MOOC は、人文学・社会学の概論・理論の講座を中心としているものであることがわかった。言語教育に関する講座やコンテンツは皆無といっても過言ではなかった。それは、おそらく K-MOOC が外国語教育に焦点を当てていないからであると考えられる。(次の節で詳細を述べることになるが) 韓国におけるネットベースの、日本語を含む外国語教育のほとんどは有料で、特定の機関・プラットフォームで行われているようである。

受講無料で、一般人を含む多くの人数を対象とする日本語 (外国語) 教育についての認識及び再検討が必要ではないかと思う。今後のそのようなプログラム、あるいは、K-

MOOC のコンテンツの拡充を期待したい。

2.2 サイバー大学

2.2.1 サイバー大学の現状

韓国におけるオンライン日本語教育は、通称「サイバー大学（遠隔大学とも言う）」を中心に行われている。もちろん、オンラインを媒体に日本語教育関連のコンテンツ（講座）を提供する民間の企業もあるが、そのすべてを把握することは非常に困難である。したがって、本稿では情報を公開しており、アクセスしやすいサイバー大学を中心に述べることにする³。

韓国におけるサイバー大学は、情報通信技術、マルチメディア技術関連のソフトウェアなどを用いて形成された仮想空間（サイバースペース）で講義が行われる大学であり、一定の単位を取得することで（学士）学位を取得することができるものと規定できる。

韓国には 21 校のサイバー大学があり、そのうち、日本語関連のコースが開設されている大学は 7 校である。内訳は、「日本学科」として分類されるのが 5 校、「実用外国語学科」が 2 校である。「実用日本語学科」は、日本語だけでなく、英語や中国語などを一緒に教育するカリキュラムを持っており、日本語教育を専門としているとは言いがたいものである。したがって、本稿では、「日本学科」を中心に確認する。

韓国のサイバー大学として「日本学科」を有しているのは次の 5 校である。

사이버한국외국어대학（サイバー韓国外国語大学）

경희사이버대학（慶熙サイバー大学）

서울디지털대학（ソウルデジタル大学）

한국열린사이버대학（韓国ヨルリン（開かれた）サイバー大学）

한양사이버대학（漢陽サイバー大学）

サイバー大学の「日本学科」に開設されている講義は、それぞれ類似している部分が多く、次のように大きく三つに分けることができた。

- 聴解、会話、作文、漢字などの基礎的な日本語能力の向上のための講義
- ビジネス日本語、JLPT 特別講座などの実用的な日本語の講義
- 日本語教育論、日本語学概論などの専門的な内容の講義

基礎的な日本語能力の講座がもっともその数が多く、実用的な講義、専門的な内容の講義がその後を追っていた。次節では、サイバー大学のひとつである「サイバー韓国外国語大学」について、カリキュラムを中心に述べる。

2.2.2 サイバー韓国外国語大学

サイバー韓国外国語大学校日本語学科は、2003 年 4 月開設し、現在に至っている⁴。当学科には 2 名の韓国人教員と 3 名の日本人教員が専任教授として在籍している。そのほか、13 名の講師が登録されている。専任教員は講義だけでなく、学科の運営及び学生の指導な

どを担当しており、講師は講義のみを担当しているようである。

サイバー韓国外国語大学日本語学科のカリキュラムは次の通りである⁵⁾。

表1 サイバー韓国外国語大学日本語学科のカリキュラム

学年	1学期	2学期
	科目名	科目名
1年	●日本語入門Ⅰ（基礎）	●日本語入門Ⅰ（基礎）
	●日本語入門Ⅰ（深化）	●日本語入門Ⅰ（深化）
	基礎日本語会話Ⅰ	●日本語入門Ⅱ
	日本文化案内人	基礎日本語会話Ⅱ
2年	シチュエーション日本語会話	コミュニケーション日本語会話
	日韓翻訳練習	日本語原書を読む
	日本語文章練習Ⅰ	日本語文章練習Ⅱ
	日本語漢字読み 基礎	日本語学の理解
	日本語現代文法	日本文学鑑賞
3年	日本語発音練習	韓日関係論
	実戦 ビジネス日本語	旅行日本語
	大衆文化日本語	メディア日本語
	日本語能力試験 3, 4級	日本語聴解練習
	実用日本語作文	日本観光案内人
	日本企業と経営	日本の歴史
4年	実用日本語漢字	—
	ロールプレイ日本語会話Ⅰ	ロールプレイ日本語会話Ⅱ
	日本語通訳練習 入門	日本語通訳練習 実戦
	スクリーン翻訳日本語	日本語能力試験 1, 2級
	日本語通訳練習専門用語	日本語教授法
	日本語教材研究と学習評価	FLEX日本語

当学科のカリキュラムは、日本語能力の育成においては、基礎的・総合的な日本語能力の育成のための講義をはじめ、会話・作文・聴解・漢字などのモジュール性の高い講義を配置している。実用的なビジネス・日本語能力試験などの講義と、日本語学・日本文学・通訳・日本語教育などの専門的な内容を扱う講義もある。しかし、これは当学科だけの傾向ではなく、韓国のサイバー大学の多くが、このような「総合的な・ジェネラルなカリキュラム」を構築していた。これは、おそらく、サイバー大学の出発点、あるいは韓国における位置づけが、従来型の一般の大学に入学しない、あるいは、通学ができない学習者への教育のためだったからではないかと思われる。

また、ネットやオンラインという媒体の特性を生かしたカリキュラムとは言いがたいことも一つの特徴である。カリキュラムだけを見れば、オンラインではなくても問題はない

ような印象を受ける。「オンラインならではの講義・カリキュラム」と言えるものが見当たらないのが現状である。

しかし、そのような中でも、実用的な講義が多く目につくのは、職業訓練や就職を念頭においたカリキュラムを構築した結果であると思われる。これも韓国におけるサイバー大学の一つの特徴であると言えるだろう。

当学科のカリキュラムの特徴について、もう少し確認する。表1の科目名における黒い丸印(●)は、必須科目を示している。1年配当の五つの講義以外は、すべて選択科目となっており、学習者が自分のニーズや学習目的に合わせて、科目履修ができるようにしている。ちなみに、当学科は、ビジネストラック・通翻訳トラック・大学院(進学)トラック・日本留学トラックの四つのコースを設定し、それぞれのコースの目的にあった講義を配当している。たとえば、ビジネストラックに入った学習者には、日本語現代文法、実践ビジネス日本語、旅行日本語、実用日本語作文、日本企業と経営などの講義の受講を勧めている。これは非常に興味深い。学習者のニーズや学習目的が様々なオンライン講義において、見本となるいくつかのコースを設定し、それを提示するというのは、オンライン講義の性質を捉えた試みなのではないだろうか。

3. 韓国人日本語学習者の発音の特徴と指導法・学習法

一般的に韓国人母語話者というと、韓国の国籍を有し、大韓民国在住の、韓国語を母語とする者を指す。これは所謂狭義の定義であり、韓国語の定義を広げると、北朝鮮及び中国の一部の地方に住んでいる者たちが母語としている言語を指すことさえある。これをさらに広げ、日本やアメリカに住んでいる韓国からの移住者の言語をも含む場合もあるが、本稿においては、研究の便宜のため、狭義の定義に基づき、記述を進める。なお、韓国語母語話者として日本語教育を受けているものを韓国人日本語学習者とする。韓国人日本語学習者が日本語の発音において困難を覚える項目としては、清濁、撥音、特殊拍、無声母音、拗音(特にチャ、ジャ行の音)などがあげられる⁶⁾。特に清濁、無声母音は、実際に音を出す「表現」の側面だけでなく、(母語話者の)音を聞き取る「理解」の側面においても問題となっていると言える。近年においては、プロソディの問題、つまり、語や句を単位とするアクセントや、文を単位とするイントネーションにおける問題点が指摘されることも多い。以下においては、韓国人日本語学習者(以下、韓国人学習者とする)の発音の特徴について問題点を中心に確認し、それに対応するための指導法・学習法について述べる。

3.1 韓国人日本語学習者の発音上の問題点

3.1.1 アクセント

日本語の高低アクセントは、韓国人学習者にはその弁別が難しい。例えば、「ハシ」においては、「箸」と「橋」の区別が「表現・理解」ともに難しいようである。これは、初級のみならず、中級や上級の学習者にもよく現れる現象で、母語である韓国語がアクセントを持たない言語であることが主な原因として考えられている。具体的には、韓国語は無アクセントで、韓国の慶尚道方言と北朝鮮の咸慶道方言はピッチアクセントである

とされている⁷。

しかし、韓国語の標準語は無アクセント説が主流であったが、最近の研究結果によると強弱と高低アクセントを持つ複合アクセント説が有力であるという。しかし、日本語のように高低アクセントが弁別機能を持ってはいない。ただし、慶尚道方言は唯一高低アクセントが弁別機能を持っている⁸。

韓国の慶尚道方言はアクセントの面において、このように日本語と類似した特徴を持っており、慶尚道方言を母語とする学習者は、日本語のアクセントの高低感覚が比較的つかみやすいと言える。これについては、検証を試みる研究者も少なくなく、慶尚道方言の一部である釜山方言と日本語の単語アクセントとの相関性のある程度明らかにしている研究もある⁹。

しかしながら、ほとんどの韓国人学習者は、日本語の単語のアクセントを一語一語覚える必要があり、日本語のアクセントは習得における困難な要素として働いている。

3.1.2 イントネーション

韓国語のイントネーションの特徴は、平叙文で下降調、疑問文で上昇調だが、WH-疑問文では丁寧に質問するときには下降調になることがある¹⁰。それに比べ、日本語のイントネーションは上昇調、下降調、平調だけでなく、上昇調のなかにも疑問型上昇調や強調型上昇調があるなど、韓国語のイントネーションに比べ、複雑な様相を見せている。なお、韓国のソウル地方のイントネーションは平板調が中心であり、韓国人学習者は、日本語のイントネーションについていけないことも多い。しかし、上述している慶尚道方言を母語とする韓国人学習者の場合、ソウル方言とは異なるイントネーションを持っているため、習得が比較的容易であると言われている。ただし、それはイントネーションについての感受性の問題であり、イントネーションの構造の理解は別の問題である。やはり、適切な日本語のイントネーションが駆使できる韓国人学習者は多くないというのが現状である。

よく観察される現象は、イントネーションが不自然なことや、イントネーションそのものがないことなどであるが、語尾に上昇調のイントネーションをつける、いわば語尾上げ現象も最近よく指摘されている。

語尾上げ現象は、比較的年齢が若い学習者に、また、男性より女性のほうによく現れるものである。この原因については、北野（2017）の研究があり、原因の一つとして、母語である韓国語の影響を指摘している。特に、年齢の若い、女性の話者における語尾上げの現象がよく観察されるという。ただし、必ずしも年齢や性別が絶対的な要因とは言えず、他にも様々なことが考えられるが、それらについては今後、更なる研究が必要である。なお、一つ付け加えると、韓国語母語話者における語尾上げ現象は、日本語学習者だけでなく、英語などの他の言語の学習者においても観察されているようである。

3.1.3 ザ行とジャ行

清濁の発音と、ザ行とジャ行の発音の問題については、戸田（2004）も指摘している通り、韓国人学習者の発音上の重要な問題点となっている。

まずは、ザ行とジャ行の混同である。これは、韓国人学習者の「ザ・ズ・ゼ・ゾ」の発音が「ジャ・ジュ・ジェ・ジョ」のように聞こえることである。例えば、「ザッシ」が「ジャッシ」に、「アリガトウゴザイマス」が「アリガトウゴジャイマス」になってしまうことであ

る。これは、母語である韓国語に「ザ・ズ・ゼ・ゾ」にあたる音がないことが原因の一つとして指摘されることが多い。

しかし、まったくないわけではない。韓国語における「자,즈(주),제,조」という音と非常に近いと言える。これを使った発音の指導については後述する¹¹⁾。

3.1.4 「ツ」の発音

「ツ」の発音は、韓国人学習者の発音における大きな問題点の一つである。初級はもちろん、上級の学習者や日本での滞在歴が長い学習者にもよく観察される現象である。例えば「ヒトツ、フタツ」が「ヒトチュ、フタチュ」に、「専門は物理です」が「専門はブスリです」や「専門はブチュリです」になってしまうことである。

母語である韓国語における「ツ」に近い音は「쓰,쓰,즈」などがある。どれも日本語の「ツ」の発音とは同じではないので、そのまま韓国語の発音を用いると、間違った発音になってしまう。「쓰,쓰,즈」の使用は、学習者によって異なるので、それをもっとも多く使うとは言えないものである。しかし、最近の韓国語における外来語表記法によると、「ツ」の韓国語表記としては「쓰」と定められているので、学習者のなかには「ツ」を「쓰」と発音してしまう場合もある。しかし、これは「ス」の韓国語表記である「쓰」と近い音であるため、更に紛らわしく、「ス」との混同を引き起こしてしまうこともある。

3.1.5 長音と短音

最後に韓国人学習者の発音上の問題としてよく指摘されている長音と単音の弁別の問題である。例えば、「オジサン」と「オジイサン」、「イッショ(一緒)」と「イッショウ(一生)」の問題である。これについては、母語である韓国語においては音の長さで意味の弁別を行わないことがもっとも大きな原因として指摘されている。

もちろん韓国語にも「音を伸ばす」という概念や現象がないわけではないが、それは意味の弁別よりは、モダルな側面、つまり話者の心的態度や、待遇的な性質が強いものとして考えられている。

3.2 韓国人日本語学習者のための指導法・学習法

3.2.1 アクセント

アクセントの問題点を解決する方法の一つとしてミニマル・ペアによる指導法が挙げられる。音は同じだが、アクセントの違いによって意味の弁別が行われる語のペア、例えば、「箸と橋」や「雨と飴」のペアを提示することが考えられる。

日本語のアクセントは弁別機能を持つということの意識化も重要であると思う。韓国語の場合は、上述した慶尚道方言の一部を除いては、アクセントは弁別機能を持っていない。このような根本的な相違点に気づくような指導が必要であると思う。もちろん、その際にもミニマル・ペアは有効であろうと思われる。

なお、最近の教材は、アクセントがマーキングされているものもある。そのような教科書を用いることも一つの方法である。教科書にアクセントのマーキングがない場合は、教師と一緒にマーキングするのも一つのやり方であろう。

3.2.2 イントネーション

イントネーションの指導法は様々であるが、シャドーイングは効果的な練習方法である

と考えられる。

筆者の教授例を紹介する。講義の後半に教材の会話文を用いて、シャドーイングの練習を行う。1文ずつ、あるいは適切な長さに切って、学習者に音声媒体に収録されている母語話者の朗読を聞かせる。学習者は間を置かずその音声に続けてシャドーイングする。このような手順で練習を行う。

練習の際、シャドーイングは文や談話・文章の単位で、イントネーション・アクセントを始め、発音をくり返し行い、それを自分のものにする、という目的の練習であることを学習者に認識させる。行為そのものも大切だが、その練習は何のためで、どのような能力の向上に役立つのか、といった目的意識をはっきりすることも重要なことである。

なお、イントネーションの指導の際は、日本語のイントネーションの最も根本的な機能、つまり表現意図を伝えるものであるということの意識化も忘れてはならない。

3.2.3 ザ行とジャ行

前述した拗音（特にザ行とジャ行）の発音の問題だが、これについては、実は、日本語母語話者の発音を聞かせても、その違いがわからないことが多いのが現状である。特に入門・初級学習者においてそのような傾向が強く、「どこが違うのか」という反応を見せることや、自分の発音の間違いにまったく気づかないことも多い。つまり、表現と理解の両面における問題点となっている。

したがって、まずは、母語である韓国語には存在しない音であることを意識させる必要がある。母語の影響を最小限に抑えるだけでなく、日本語についての先入観を取り除き、知っている音、なんとなく馴染みのある音ではなく、「新しい音」として習得させるためである。一つ一つのテクニックも重要であるが、まずはこのような意識化が先に必要ではないかと思う。韓国語に存在しない音なら最初からその発音を練習するしかないからである。

「ザ行」の具体的な練習方法だが、子音と母音を分けて練習させる方法がある。学習者にまず、/z/を発音させる。その/z/に続いて「あ」を発音するようにする。/z/～+「あ～」のようなものである。やがては、その二つを続けて一緒に発音するようにする。「z～あ～ザ!」のような流れである。/z/～のあとに続くのが、「あ～」であれば「ザ」、「う～」は「ず」、「え～」は「ぜ」、「お～」は「ぞ」となる。他の発音も同様の要領で練習させる。これは、発音を音声的な視点から捉えることができるやり方と言える。つまり、構造的な観点から発音を捉えることになるので、知的水準が高い学習者や、論理的なことを好む学習者、特に日本語を専門・専攻とする学習者に有効な練習方法なのではないかと思う。

3.2.4 「ツ」の発音

次に、「ツ」の発音の指導である。まずは、母音の「ウ」の発音から始める。日本語の「ウ」は非円唇母音である。日本語の「ウ」とよく比較の対象となる韓国語の母音「ㅜ」は円唇母音なので、似ている音ではあるが、同じ音ではない。まずは、母音の「ウ」の発音の練習から始めたほうが良い。

「ウ」の発音の具体的な要領は次の通りである。まず、韓国語の母音「ㅡ」の発音時の唇の形にさせる。韓国語の母音「ㅡ」は非円唇母音である。その後、そのままの状態、韓国語の母音である「ㅜ」の発音をするように指示する。「ㅜ」は、日本語の「ウ」の発音に

おける舌の位置と同じである、つまり、後舌母音である。そのようになると、韓国語の母音の「ㄷ」の非円唇の口の形で、「ㅡ」の後舌の位置が一緒になり、日本語の「ウ」の発音に非常に近いものになる。これは、日本語の「ウ」の発音が、学習者の母語である韓国語の「ㄷ」と「ㅡ」の発音の間にあるものとして捉えた考え方で、韓国人学習者に適した練習方法及び教え方と言える¹²。

このように「ウ」の発音の練習が進んだら、「ツ」の練習に移ることができる。上述したとおり、「ツ」は韓国語にはない発音である。練習した「ウ」に子音を載せるという感覚を持たせるのが大切である。具体的には、次のような方法が考えられる。

まずは、韓国語の「ㅍ」の舌の位置を意識させる。その位置から軽く上に舌をつけて息を出すように発音させる。「ㅍ～」に舌をつけ、「ツ」になるような流れである¹³。

「ツ」の発音の練習の際には、「ウ」の場合と同様、唇を丸くしないという点を強調する必要がある。韓国人学習者は、韓国語の円唇母音を意識しがちで、唇を丸くしたり、唇を前に出したりするなどの誤用が多いが、そのような間違っただと「チュ」になってしまうので、注意が必要である。

3.2.5 長音と短音

最後に長音と短音の問題である。これについては、「拍」、つまりモーラを用いて指導することが一般的である。伸ばす音も一つの拍であるということを学習者に伝え、手拍子と一緒に提示することが多い。例えば、まず、教師が手拍子と一緒に、「お・じ・さ・ん」は4拍、「お・じ・い・さ・ん」は5拍であることを示すのである。リズムという観点からは、「おじ・さん」は2ビート、「お・じい・さん」は3ビートとなる。その後は、学習者に同じく手拍子と一緒に発音をさせるという手順である。これは、実際に体を動かす練習なので、学習者の反応も非常にいいものであり、定着も速い。

なお、この手拍子を用いた拍の認識、長音の練習は、韓国の日本語教育ではかなり一般的なものとなっており、韓国における中等教育（中学・高校）の教科書の多くは、この手拍子の練習法を載せている。

4. まとめと今後の課題

以上、韓国におけるオンライン教育、特に日本語のオンライン教育の現状・問題点と、韓国人日本語学習者の日本語音声教育の現状・指導法について述べた。

韓国におけるオンライン教育としては、K-MOOC とサイバー大学について述べた。2015年に立ち上げたばかりのK-MOOCは、「社会」や「人文」に講座が集中しており、言語教育、特に日本語教育の講座は非常に少なかった。関連機関及びプロジェクトチームの活発なコンテンツの提供及び講座の開設が必要であると考えられる。サイバー大学は、インターネットを基盤とする仮想空間(サイバースペース)で講義が行われる大学である。韓国における21校のサイバー大学のうち、「日本語学科」が開設されているのは5校であった。サイバー大学における日本語教育は、学習者の多様なニーズに対応できるように、様々な種類のコースを設けていたが、コース・カリキュラムの構成と講義の内容がオンライン教育の特徴を反映しているとは言いがたい部分もあった。今後はオンライン教育の特徴を

活かしたコースや講義の開発が必要となるだろう。

韓国人学習者の日本語音声教育の現状としては、アクセント、イントネーション、清音・濁音・拗音、長音・短音、それから「ツ」の発音の項目をあげた。それらはすべて韓国人学習者の音声教育・指導における問題点となっている。問題の原因としては、まず、母語である韓国語の影響があげられる。アクセントにおける弁別機能がない点、イントネーションが乏しい点のような韓国語の音声的な特徴をはじめ、慶尚道方言・ソウル方言の影響があげられる。指導法・学習法としては、ミニマル・ペアの提示、シャドーイングを通じた反復練習、韓国語の母音を用いた練習、手拍子と一緒に覚える拍の概念などが考えられる。これらの指導法・教授法は、教育現場の経験の蓄積によるものもあれば、理論的根拠のあるものもある。今後は更に効果的な指導法・教授法の開発・研究が必要である。

今回の調査は、公開されたデータやホームページにおける情報をもとにしたものなので、韓国における日本語のオンライン教育の現状を網羅するには至らなかった。さらに幅広い調査が必要となる。なお、日本語オンライン教育における教師・学習者の認識や意見についての記述はできなかった。これについては今後の課題としたい。

なお、韓国人学習者の日本語音声教育の現状においては、紙面の都合もあり、限られた項目・内容の提示に留まった。本稿で扱い切れなかった日本語音声教育における問題点と原因、教授法・学習法については、次の機会を得て取り組みたい。

注

- 1 本稿は、2017年度韓国外語大学校（Hankuk University of Foreign Studies）の校内学術研究費の支援によって作成されたものである。
- 2 出典はK-MOOCのホームページ（<http://www.kmooc.kr/>）である。最終検索日は2017年8月20日である。以降におけるK-MOOCに関する記述は、このホームページに公開された内容に基いたものである。なお、K-MOOCは一般にKMOOCと表記されることもある。
- 3 出典はサイバー大学の連合ホームページ（<http://www.cuinfo.net/home/index.main.action>）である。最終検索日は2017年8月20日である。以降におけるサイバー大学に関する記述は、このホームページに公開された内容に基づいたものである。
- 4 出典はサイバー韓国外語大学のホームページ（http://www.cufs.ac.kr/dep/jpn/depjpn_overview.jsp）である。最終検索日は2017年8月20日である。以降におけるサイバー韓国外語大学に関する記述は、このホームページに公開された内容に基いたものである。
- 5 2017年8月現在、当学科のホームページに公開している資料である。科目名はすべて韓国語である。和訳は筆者が行ったものであり、必要に応じて多少調整を施している。
- 6 戸田（2004: 102-109）、日本語教育学会編（2005: 45）
- 7 日本語教育学会編（2005: 45）。なお、韓国の慶尚道方言と北朝鮮の咸慶道方言とは音声的な面において類似しているという。その理由の一つとして、朝鮮時代における移住政策、慶尚道地方の住民を開拓を目的に咸慶道に強制移住させた歴史上の政策があげられている。
- 8 이향란（2010: 28）
- 9 北野（2017: 1-130）
- 10 日本語教育学会（2005: 45）
- 11 日本語の「ザ・ズ・ゼ・ゾ」に対応する音として、韓国語の「자,즈,제,조」をあげているが、それらは清音に近い音と言える。なお、「ズ」の対応として「즈(予)」のように二つの音を併記しているが、日本語の「う」の発音は非円唇母音として、韓国語の「ㅡ」とも「ㅍ」とも異なる音だからである。

- 12 これについては、戸田（2004）が参考になる。
- 13 これについては、戸田（2004）を参考にしている。

参考文献

- 北野孝志（2017）「ソウル方言話者の日本語発話に見られる語尾上げに関する研究—母語の転移を中心に—」 韓国外語大学校一般大学院博士学位論文、pp. 1-130
- 戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク、pp. 102-109
- 日本語教育学会編（2005）『日本語教育事典』大修館書店、pp. 44-45
- 이향단（2010）『일본어음성교육』어문학사、pp. 28-76

（きむ どんぎゅ 韓国外語大学校日本語大学日本語文化学部）